資料

「教養と無秩序」——十九世紀英国の政治情勢に関する文学的考察

渡辺栄太郎

一

十九世紀なかば、大学在学時代に詩人として出発したアーノルドは、当時のめまぐるしく変動する社会情勢の中にあって、失恋の体験や科学と宗教の対立という思想的相剋に苦悩しつつ、常に暗い懐疑の底にあった。彼の青年期の作品には、この懐疑の暗さを実感し、その克服を求める願いが如実にうたわれている。その後一八五一年、視学官の職についたことがこの懐疑の精神に行動へと飛躍する端緒を与え、後期の詩集には実生活の場において、行動へと踏み切った彼の新しい心境を暗示するものが多い。

ところで一八五七年、アーノルドは八五票という審議会の大多数の推挙を受けて、オックスフォード大学の詩学教授の席に就いた。この教授就任を契機として彼は従来の詩作活動を離れ、最初の文学批評論「文学の近代的研究(1857)」"On the Modern Element in Literature"を皮切りに、「ホーマー翻訳論('61)」"On Translating Homer"「批評論叢第一集('65)」"Essays in Criticism,

1st Series" と次つぎに批評論を発表し、一躍して実践的行動へと完全に転向したのであった。これに続く「教養と無秩序」"Culture and Anarchy" は、オックスフォード就任十年めに当る一八六七年に初めて雑誌に掲載されて約一年間続き、六九年にまとめて出版されたものである。これは従来の文学批評の領域から、文学者の関心が社会問題に踏み込んだ画期的論文で、その意味でも、文学史上に著しい発展的意味合いを持つ評論といえるものである。以後彼は引続き論壇に活躍し、晩年には文学者としてよりもむしろ哲学者として、その思想を深めて行った。

さて、本著「教養と無秩序」の書かれた当時のイギリスは、ヴィクトリア女王の治世も漸く後半に入り、その国力を大いに海外に伸展させていた時代である。すなわち、十八世紀後半に始った産業革命が進行し、資本主義が序々に社会の体制を整備してくるにつれて、この頃巨大で富裕な中産階級が形成されてきたのであった。一八三七年に女王が王位について以来、英国民は経済・貿易・植民地に関して大きな進歩を示し、選挙法の改正など内政面でも実り多い改革を実現しつつ、対外政策に偉大な成功を収めた。その間、中心的な役割を演じたのがこの中産階級であって、自由主義の名のもとに飽くなき富の畜積を果しつつ、政治的支配力を握った。こうして、彼らはイギリスに産業上の最隆盛期をもたらし、大英帝国を建設して、世界第一級国の地位を固めたのである。

この反面、当時イギリスの社会労働問題は極めて厳しい情勢下にあった。労働者階級は資本家による搾取に苦しめられ、度重なる飢饉と恐慌に襲われるという悲惨な状態を経験していたのである。一八四六年には、遂に穀物条例の廃止が実現せられ、四七年、十時間労働法の議会通過、四八年のフランス二月革命とロンドンでの「共産党宣言」の発表など、国の内外を通じて労働者階級の自覚の高揚を示す動きが続発した。その後、五一年の機械工合同組合の設立、六三年のマルクスによる国際労働者協会の創立を経て、年を追うて、労働者階級の資本家に対する不満は本国全体に拡がって行った。時の自由党宰相であったグラッド・ストーンは、六六年に労働者階級にも選挙権を与えようとしたに拘らず、右翼の反対にあってその法案は一時否決された。ここに労働者階級による全国的な示威運動と、いわゆるハイドパーク騒動が

起って、翌年ようやく、これが議会を通過したのであった。またこの頃、労働組合法の制定をせまって、シェフイールドに起った工場機械の破壊事件、アイルランド独立期成会員によるチェスター・カースル襲撃問題、引続いて、一連の逮捕者奪回の騒動、内務大臣官邸乱入事件などが相次ぎ、国全体各地で不穏な事件が続発して、イギリス国内は甚だ不隠な社会情勢下にあったのである。アーノルドはこのような社会騒乱と無秩序的傾向の渦中にあって、社会の現状と未来を憂慮し、秩序の回復と混乱防止の方法を探求していたのであった。この趣旨を「教養と無秩序」によってみれば、彼は政治の基本的根源を人間一人ひとりの教養に求め、これを主張鼓吹し、広く一般の人びとに深く自覚せしめることによって、社会全体の救済を計ろうと考えたのである。

さてこの「教養と無秩序」も、発表されて以来既に満百年を経過している。本書において展開されたドラマや、提起されている問題意識は、今日では歴史的事実の中に埋没して、時代の懸隔を感じない訳にはいかない。単にイギリスの社会情勢ばかりでなく、世界全体が、この百有余年の間に大きな変貌をとげ、今日では一国の動勢も、世界全体の動きに関連させて把握しなければ意味をなさない問題も数多くなっている。しかし、いずれの国、いずれの社会をとってみても、依然としてそれぞれに独自の問題をあまた抱えて解決を待っているのが現状であり、特に発展途上にある日本の産業経済社会にとっては、イギリスにおける百年前の状勢と共通する点も多々発見することができるであろう。このように考えるとき、アーノルドの精神的文化論、教養論も、今日のわれわれにとって一つの参考、一つの反省の材料にもなるかと思うのである。

二

一八二八年ジョージ四世の治下、当時の首相ウェリントン公が審査律の廃止を決議したことが、イギリスのアンシアン・レジーム（旧制度）を破壊する端緒となり、以後、選挙法の改正、労働時間の規制やアイルランド問題など、幾多の変動の嵐がイギリス社会を襲い、一八三七年にヴィクトリア女王が即位した後もこの余波は継続して、国内にも実り多い改革が実現した。しかしこれらの

重大な諸改革は、イングランドでは大陸の諸国と著しい対照をなして、その大多数が保守主義者であった政治家の手で成就されたということである。彼らはそれが自分たちの主義や利益に相反する場合でも、世論の要求を素直に認め、一たび議会を通過すれば忠実にこの法の適用を認め、これに逆行するような策略は用いるべきでないことをよく理解していた。これらの保守主義者は決して反動的だったのではなく、大衆の要求する改革を常に念頭において適宜に彼らの渇望するところを満足させ、国土に革命の暴発するのを防いだのであった。この間、改革が実現されるまで、市井にはデモや破壊活動が幾度となく繰り返され、社会を不安に陥れたことは第一章に触れてきた通りである。

さてアーノルドは、このような社会騒乱の中に在って事態を深く憂慮し、正しい道理を実現し、完全に向かう人類の進歩が約束されるために、先ず社会の無秩序は第一に回避すべきものと考えた。秩序がなければ社会や人間に完全が存在することはなく、誰がその支配権を握ろうと、無政府状態と無秩序とは専心的に鎮圧されるべきものだと判断した。そして当時のイギリス自由党が大衆示威に対して寛大であるのを指弾して、たとえ抑圧の手段をもってしても、大多数の人間の街頭行進や公園への不法な侵入は断固として禁止し、制止されなければならないと強硬に主張している。その理由は、人が現在または未来のために永続的な価値あるものを成就しようとすれば、法律が最高の権威を持つ国家、公けの秩序の健在が必須のものであるからだというのである。

——for us the framework of society, that theatre on which this august drama has to unroll itself, is sacred; ——(1)

Thus, in our eyes, the very framework and exterior order of the State, whoever may administer the State, is sacred; ——(2)

「われわれにとって社会の骨組み、この厳しゅくな劇がその上で展開しなければならないあの劇場は神聖である。——

このようにしてわれわれの目には、誰が国家を支配しようと、国家の機構そのものとその外郭的秩序とは神聖である。」

アーノルドにとって、国家の秩序は不可侵のものであり、絶対に損壊してはならないものであった。そこで彼は国家機構を全く破壊することなく、新しい要求に社会を適応させていく方法を、意識の上に人間完全への道を追求する教養“culture”に求めたのであった。今二十世紀後半にも達する現代的視点からすれば、彼の改革論はいかにも観念的意識問題に偏っていて、その硬化した社会観には賛同できないが、素人の政治学として見れば、いかにも文学者らしい発想であると言えなくもないであろう。しかし政治そのものも民主主義においては、大多数の人間意識の上に成立するものであるから、その意味で、少くともここに重要問題を孕んでいる事実も否定し得まい。

さてこの「教養と無秩序」において示される命題の第一は、社会の混乱無秩序から人間を救済する権威の原理を、いずこに置くべきかということである。アーノルドはこの結論を「教養」という言葉に託したのであるが、この著作からは、われわれが著者によって、教養かあるいは無秩序かの恐るべき二者択一の選択を迫られるような印象を受ける。もちろんアーノルドは教養という言葉を、世間一般の常識として用いられているように、純文学的な上品振りを表わすものとして使用したのではなかった。その言葉は、生活によって会得される市民各個人の経験的理性への、あるいは人間各個人の人格完成への意識的努力といったものばかりでなく、社会生活的な意味合いを含む非常に幅広い内容を有するものと思われる。彼はその「序文」“Preface”(1865)の中で、教養に関して次のような見解を述べている。

——; culture being a pursuit of our total perfection by means of getting to know, on the matters which most concern us, the best which has been thought and said in the world; and through this knowledge, turning a stream of fresh and free thought upon our stock notions and habits, which we now follow staunchly but mechanically, vainly imagining that there is a virtue in following them staunchly which makes up for the mischief of following them mechanically.(3)

「教養とは、われわれに最も関係のある事柄につい

て、世界で考えられ言われてきた最善のものを知ることによって、われわれの全体的完全を追求することである。更にこの知識を通じて、われわれが今忠実に機械的に追従しているこれまでの観念や習慣に、清新で自由な思想の流れを注入することである。またその古い観念や習慣に忠実に従うことによって、それらを機械的に守る弊害を償うだけの功徳が得られると想像するのは、無意味でしかない。」

すなわち、アーノルドはこの見解によって教養の基本的役割を説明したものと解されるが、これは人間生活を支配する思想とか慣習といったものについて、旧来の因習や偏見に捕われることなく、自由に最も価値ある知識を求め、人間性の広い立場から判断することによって、個人的にも社会的にも、円満な人間的完全に到達することを主眼としたものであろう。この「世界で考えられ言われてきた最善のものを知ることによって、全体的完全を求める」という考え方は、彼がサント・ヴウブ[4]に学んだ批評の方法、「対象をありのままに見る」"to see the object as in itself it really is"ことによって最も完全で客観的な観察をするという態度と、本質的に共通する同一の文学理念に源を発するように思われるのであるが、もしそうだとすれば、彼の教養論は彼自身の文学概念の一種の政治化であると見ることもできる。このような論理の飛躍が、後代のT・S・エリオットによって「アーノルドは広くて正確な学識の人ではなかった[5]」として批判される根拠にもなっているのであろう。

さて当時十九世紀中葉におけるイギリスの社会情勢は、前章で簡単に述べたように、国内的には、不穏な事件の相い継ぐ動乱の様相を呈していた。アーノルドはこのような社会の混迷についてその由来する原因を探り、分析した結果、根本的にはイギリス国民の狭隘な精神的風土、すなわちその地方人根性に起因するものと判断したのであった。これは彼が大陸を視察することにより、特にフランスと比較して一層その感を深くしたのであるが、イギリスには特に地方において、視野の狭い頑固な勢力が、伝統的に根強く存在することをつき止めた。この実際例として、彼は清教徒と新教的非国教徒による運動を問題として取り上げている。すなわち、国立教会員がイギリス国民の宗教生活に適合する合理的な宗旨を抵抗なく受け入れる結果、教養と円満な人間性の完全を目指

す努力を払う余裕があるのに引きかえ、非国教徒の人びとは、宗教上の本質的問題でない主義主張に固執して国民生活の主流から隔離して存在し、人間としての全体的な完全性への発展を阻害しているというのである。アーノルドはこのように判断して、当時のアイルランド国立教会廃止の運動や、その他一連の政治的宗教的社会騒動を厳しく非難した。いわば彼は、イギリスにおいて、宗教の一側面のみが強調されて国民生活を支配し、国民性が狭量化して完全性への努力から遠ざかる傾向を強めはしないかと怖れたのである。このようにして、イギリス人の中に潜む独善的な狭量さに注意を換起したのであるが、この考えは、既成の本流から離れた一宗派に依存してその狭隘な道徳律のみを尊重し、人間知性の自由な働きを喪失することに、警告を発したものと見ることもできよう。

※　※　※

次に、唯今まで取り上げてきたイギリスにおける人間性の一側面偏重の傾向、すなわち専心に道徳性を希求する生き方、長い歴史の中で固定化した既成の道徳律を、批判することなく追従する熱意と精力の観念、これをアーノルドはヘブライ主義（Hebraism）と名づけた。

The uppermost idea with Hebraism is conduct and obedience. ——; the Hebrew quarrel with them (the body and its desires) is, that they hinder right acting. "He that keepeth the law, happy is he;" "Blessed is the man that feareth the Eternal, that delighteth greatly in his commandments;"(6) ——that is the Hebrew notion of felicity; ——

「ヘブライ主義にとって最高の観念は、行為と服従である。（中略）ヘブライ人の肉体とその欲望とに対する苦情の種は、それらが正しい行為を妨げることである。『律法を守る者はさいわいである。』（「箴言」二九の一八）『主をおそれて、そのもろもろの戒めを大いに喜ぶ人はさいわいである』（「詩編」一一二の一）——これが幸福についてのヘブライ人の観念である。」

元来この概念は、旧訳聖書に見られる古い律法を神の意志として忠実に守り、忍耐して正しい行いを続けよ、という戒律的要求に基づくものであって、ヘブライ人の

全生活を律するための掟の網であった。そしてそれは、絶対なる神の下における良心のきびしさであった。キリスト教においても、この知ることよりも行うことを重くみるヘブライ主義の本質的傾向は、少しも変っていないといってよい。そこでは古い律法の代りに、イエス・キリスト自身によって提供された献身と自己克服のあの霊感と感動とに帰依することにより、われわれ個人の自由意志にでなく、神の意志に絶対的に服従することを意味する。アーノルドは柔軟な思考力に欠いて、固定した観念に捕われやすい英国人の感覚を、その狭い地方性と融通のきかない宗教性に結びつけて考えたのである。

一方、英国人は一般的にいって、その知性よりもむしろ精力(energy)と実際性に特質を有すると考えられている。アーノルドも、このような長所に基づくイギリス人の、職務と克己と労働に対する崇高な義務観念を素直に認め、その実践的能力を高く評価した。しかしこの実際的傾向も、先程の宗教性と相い俟って歴史上過度に続いた結果として、国民性の中に、狭量な地方人根性ないし島国根性とも呼ぶべき弊害を生じた、と彼は判断したのであった。そこでこれを除去し、人間をその完全性に向

わせる唯一の方法として、アーノルドはギリシャ主義(Hellenism)を導入したのである。ギリシャ主義とは、端的にいって、正しい思索を最上の本質とする理念であって、「教養と無秩序」第四章で次のように述べている。

"An unclouded clearness of mind, an unimpeded play of thought, is what this bent drives at."(7)

「精神の曇りない明晰さ、思想の阻害されない活動が、この傾向の目指すものである。」

またこれをヘブライ主義と比較して、

The uppermost idea with Hellenism is to see things as they really are; ——The Greek quarrel with the body and its desires is, that they hinder right thinking; ——The Greek notion of felicity, on the other hand, is perfectly conveyed in these words of a great French moralist: "C'est le bonheur des hommes,"——when? when they abhor that which is evil? ——no; when they exercise themselves in the law of the Lord day and night? ——

no; when they die daily? ——no; when they walk about the New Jerusalem with palms in their hands? ——no; but when they think aright, when their thought hits: "Quand ils pensent juste."(8)

「ギリシャ主義にとって最高の観念は、事物をありのままに見ることである。（中略）ギリシャ人の肉体とその欲望とに対する苦情の種は、それらが正しい思索を妨げることである。（中略）他方、ギリシャ人の幸福の観念は、偉大なフランスの哲人の次のような言葉に完全に伝えられている。『人間が幸福であるのは』—いつか。かれらが悪しきものを憎むときか。いな。かれらが日夜、神の掟にみずから服せしめるときか。いな。かれらが日びに死ぬ〔「コリント人への第一の手紙」一五の三一〕ときか。いな。かれらがシュロの葉を手に持って新しい聖地を歩きまわるときか。いな。そうではなくて、かれらが正しく考えるとき、かれらの思想がまとを得ているとき——『かれらが正しく思索するときである。』」といっている。

アーノルドは、ギリシャ的観念とヘブライ的観念との両方の根底に、人間に生来そなわっている道理と神の意志とを求める欲求、すなわち宇宙の秩序を探究する感情——神への愛が存在すると考えた。このうちヘブライ主義は、宇宙における摂理に関して明瞭かつ重大な告知をとらえ、熱烈にその研究と順守とに専念するよう要求する理念であるという。これに対して、他方のギリシャ主義的傾向は、柔軟な精神活動をもって宇宙の秩序の作用全体をあとづけ、一つの啓示一つの告知の中に休止することから逃れて、あくまで均衡と調和を保ちつつ、永遠に完全性を希求してやまないものである。一言にしていえば、ヘブライ主義の支配的観念が良心の厳しさに在るとすれば、ギリシャ主義のそれは、意識の自発性にあるということであろう。アーノルドは、特にイギリス国民の精神生活の中に、自由な観念の行使と物にとらわれない思考の欠如を痛感して、このギリシャ主義の必要を強調したのであった。そしてこのギリシャ主義の核心に、端的な表現を与えたものが、「美と光」'Sweetness and Light' という概念なのである。

——and, indeed, the Greek word εὐφυια, a finely

tempered nature, gives exactly the notion of perfection as culture brings us to conceive it: a harmonious perfection, a perfection in which the characters of beauty and intelligence are both present, which unites "the two noblest of things," ——as Swift, who of one of the two, at any rate, had himself all too little, most happily calls them in his *Battle of the Books*, ——"the two noblest things, *sweetness and light*."(9)

「そして実に、精神の見事に陶冶された性質、ギリシャ語でいうエウフュイアは、教養がわれわれに考えさせる完全の概念を正確に表わしている。均整のとれた完全、その中で美と知性が両方ともに存在しているような完全さ、——スイフトが、彼自身はともかく、二つの中一つを欠き過ぎていたにしても、その著『書物合戦』の中で極めて適切に呼んだ——『最も崇高な二つのもの、優美と英知』を結合しているような完全のことである。」

ここに述べられている通り、「優美と英知」という概念は、彼の造詣深いギリシャ文化の言語手段であるギリシャ語の、エウフュイアに由来することが判った。この言葉エウフュイアは、人間性における美的要素と知的要素との均衡と調和を象徴したもので、完全を求める教養の本質を表わしているものであるから、これに由来した「優美と英知」の概念こそ、彼の掲げる教養の中核をなす理念だと定義することができよう。

また、アーノルドによれば、この教養の精神は優美と英知を完全の性格とする点で、詩歌と同様の性質を持つ(10)という。これは、疑いもなく、彼の教養論が、その文学理念の政治化であることを示唆する一つの根拠になっていると思われるが、いずれにせよ、この美的傾向重視の姿勢は、この頃漸く文学界に抬頭してきた審美主義の風潮、あるいは、アーノルド自身の美学への関心が反映されている点も見逃し得まい。「教養と無秩序」には、十八世紀イギリスの心理主義経験論者で美学者のE・バークの名が繰り返し引用されて、アーノルドへの影響の深さを感じさせるが、一方で、当時ヴィクトリア時代の文学論壇が、カーライルからアーノルドを経て、ペイター、ラスキン、遂にはワイルドなどの唯美主義批評に連なる事実を考慮すれば、この「美と光」という端正な概念さ

え、一部に、世紀末のダダイズムの出現を予想し得る位置にある点も、全く否定するわけにはいかないと思う。しかしこれはともかく、アーノルドはその永年にわたるギリシャ研究の結果、「完全なる調和を美として見る」というギリシャ的美学観を基礎として、いわゆるエウフュイアからこの「美と光」を導入して教養精神の中核と成し、「光」である知性の自由かつ可能な限りの活動を通じて、人間性の調和された完成、すなわち「美」に到達しようとの考えを表明したものと想像される。これこそ、当時イギリスの社会の混迷を打開し、各人が教養の命ずるところに従って最善の自己を発揮し、遂には平和に社会の改革を実現しようともくろむ、アーノルドの基本的政治理念であったのである。

※　※　※

さて以上に、社会の混乱と無秩序から、人間を救済する権威の原理を、アーノルドが教養に託したことを述べてきた。そこでここでは、アーノルドの分析に従って、イギリスに存在する階級社会にこの原理を探ってみることにしたい。彼はこの問題を、「教養と無秩序」の第三章で詳しく取り扱っている。その中で彼が、イギリスにおける貴族、新興の中流階級、および労働者の三つの階級を、それぞれ野蛮人 (Barbarians)、俗物 (Philistines)、大衆 (Populace) と呼んだのは広く知られている事実である。しかし、これらの階級にはそれぞれ一長一短の特徴があるけれども、この中のいずれにも政治的権力を委任し、無秩序を抑える権威の原理を託すべき資格のあるものがないと彼は考えた。まず貴族階級は、カーライルのいうように、危機を乗り切るために重い職責を担うべきだという主張があるに拘らず、現世の栄光や安全、それに権力や快楽に魅惑されて、外面的な作法とたしなみのみを追求し、英知に不足する。また中流階級は、英国の隆盛を支える重要な柱の役割りを受け持つものとして、当然、剛健で独立の気風に富むが、実利的俗物根性が著しく、自由の名のもとに、産業的利益の追求にのみ狂奔する有様である。これはすなわち、清教徒的地方人根性に起因する現象であって、人間性に狭隘な道徳性を強調し過ぎた結果として、信仰を形式的に守りさえすれば、何を行ってもよいと考える風潮が、この階級に滲透したためだと考えた。また大衆は、労働階級勢力の結成に心

血を注いでいるが、本質的には彼らも俗物に属して好き勝手な行動に走り、ますます優美の理念からは遠ざかって行く傾向にある。いわば各階級それぞれに、好きなことのみ追い求め、この気風がイギリス人全般の国民的無知を醸成し、民俗的偏見の温床を形成していると、判断したのであった。

三

アーノルドがオックスフォード大学教授に就任して最初に手掛けた評論「文学の近代的研究」の中で、人間を救済し、社会の人びとに真の自由をもたらすには、道徳的救済と知的救済とが必要であると説いた。彼はその論文では、文学の内部で救済を実現する道を探求したのであったが、この「教養と無秩序」に至って、舞台をはっきりと文学から社会問題に転じ、改めて社会理論の上に、救済法を追求したかにみえる。しかしヘブライ主義もギリシャ主義も、実はといえば、この「文学の近代的研究」に示された二つの概念が、その意味の本質に手を加えられぬまま、政治社会理念として、形を変えて再登場してきたものだということが判る。そしてヘブライ主義もギリシャ主義も、道徳的救済も知的救済も、アーノルドの二元論的思考法を特徴づける根拠となるような気がするのである。だがいずれにしても、英国人の偏狭な俗物主義を排するために、知性の向上、思想の自由な活動を盛んにする精神的革命、すなわち教養教をかかげて社会の秩序を維持し、国家体制を改変することなく、安全かつ平穏に、人間性の完全に到達しようとする。これがアーノルドの提唱する、理想社会実現のための教養の意義であった。

ところで、今世紀の代表的文芸批評家T・S・エリオットは、一九四八年出版の「文化の定義のための覚書」で、次のようなことを述べている。

Arnold is concerned primarily with the individual and the 'perfection' at which he should aim.

——; but his criticism is confined to an indictment of these class for their shortcomings, and does not proceed to consider what should be the proper fanction or 'perfection' of each class, The effect,

therefore, is to exhort the individual who would attain the peculiar kind of 'perfection' which Arnold calls 'culture', to rise superior to the limitations of any class, rather than to realise its highest attainable ideals.(11)

「アーノルドは第一義的に、個人と個人の目ざすべき『完成』とを問題にしています。（中略）しかし彼の批評はこれらの階級を、その欠点ゆえに告発するにとどまって、各階級の本来の機能あるいは『完成』が何であるべきかを考察するところまでは行っていないのです。したがってその結果は、アーノルドが『教養』と呼ぶ一種特別な『完成』に達しようとする個人に向って、その個人が属する社会の達し得る最高の理想を実現するよう要請するのでなくて、個人がすべて階級なるものの限界を、超越するように勧告しています。」

確かにアーノルドは、繰り返し多くの実例を挙げて教養の必要を説いているが、極論すれば、個人の完成即理想社会の実現というような論理の飛躍であるか、あるいはこの間の説明の不充分があって、近代の読者にとっては何処となく手薄い印象を与えるであろう。その幾分かの理由は、彼の描いた風景に社会的論理の背景が欠けているということなのだと思われる。しかし現実問題として、教養を拡充するだけで、果して社会の改善が可能であろうか。もしも教養が、社会の底辺を含む一般大衆の中に完全に普及したとしても、その社会意識の総体的向上は社会の民主化に何らかの影響を与えずにはおくまいが、人間生活の根本にある利害の対立まで、完全に制御し得るものになるかどうかには、疑問が感じられる。階級意識、特に経済問題を中心に、地位・門閥その他諸もろの社会的条件が、教養のみによって克服され得ると考えるのは、人間性に対する洞察が甘すぎはしないだろうか。アーノルドは秩序の維持が必要であることを繰り返し力説しているが、堅固に組織された国家機構を、教養の力で改革するのは可能であろうか。彼は社会機構の改革や国家体制の改変などには、思いも及ばなかったのである。

しかし、現実の国家が階級社会から成立しているというのは、厳然たる事実であるといってよい。国家は階級社会の立場から、相異った利害関係や相争う党派に分れ

ているのであって、良心の存在を無視し、国民全体の利益に関心を持たない個人や階級の現実を考慮せずに、理性的で全国民の利益に奉仕する国家権力を創造するのは不可能であろう。実際には、政治理論の力というよりも、階級の力の比率がこの権力の方向と、その公正の度合いを決定しているといった方が、より適切であろう。この階級の力に差があれば、当然に公平さは失われ、伯仲する場合には均衡を保つようになる。アーノルドは、本当のところ、当時の強い階級感情に直面して、階級の力関係に基礎を置く国家の概念を回避してしまったのである。もし彼が、階級闘争という血なまぐさい事実に、正面から立ち挑む姿勢をいとわなかったとしたら、彼はこのような国家観には全く気付かなかったという外はなかろう。このようなわけで、結局、実際性の薄い、教養に基く各階層における最善の自己(best self)に、すなわち、利害関係を没却した各階級の理性に、国家の基盤を見出したというべきである。

だからここで、アーノルドは誤謬をおかしたのではなかろうか。元来、階級という言葉の本質には、明らかに、差別的利害関係の意味が含まれているのである。もしこの言葉から、特殊な利害関係の概念を取り去ってしまうと、現代に通用する用法として、それは殆ど意味をなさなくなってしまうであろう。改めて言い直せば、現代における階級の意義はその利害関係にあるということである。もちろん、このことは自己の直接的利益を犠牲にしても、理性や愛情の命ずるところに従うという個人の意志について問題にしているわけではない。だが秩序の維持を重んずる余り、利害を度外視した階級を語り、利害関係を失った階級に基礎を置いた国家を論ずることは、筆者がいかにそういう社会を望んでいたとしても、明らかな自己矛盾であったといわれても致し方ないと思うのである。

※　※　※

ところで、現代の政治哲学における永続的な疑問点は、どのようにして権力と理性を一定の為政者に託すべきか、いかように権力に理性あらしめるか、あるいはいかにして理性に権力を賦与すべきか、ということであるといってよい。自己の利益の追求にのみ急で、理性を無視し、これに従うのを拒否する階級や個人を、他の階層

や個人の利益のためにも奉仕させる必要があるために、権力を伴った国家が要求されるのはやはり当然であろう。しかし、このような部類の階級や個人は、たとえ強制力を甘受するように仕向けられても、尚かつ自然と、その理性に反発するものとみてよい。アーノルドは、教養主義による自分の政治理論に実際性のあることを断言しているが、その国家観ははなはだ部分的で、決して論理的妥当性を有するものということはできない。それだから、もし彼が、自分の主張する国家を、理論的にも実際的にも根拠ある確実なものにしたかったならば、「教養」を主張するまえに、彼は次のように言わなければならなかったのではなかろうか。すなわち、「或る人びとに理性が堅持されていても、他方にこれを保有しない人間の階層がある。だから、一方に理性を保持する人びとがあれば、そうでない者にこれを強制する権利を賦与すべきである」と。そしてこの上に、彼は「理性」について、なお深い探求を試みるべきだったと考える。

結局、理性は、国家権力の基礎として、充分な根拠とは成り得ないであろう。国家は政治、すなわち人民に体現されるものである。国家は階級によって存立するのであり、階級は人民の集団であって、道義的要素ではないからである。さきに引用したT・S・エリオットの言葉を借りると、

The kind of political theory which has arisen in quite modern times is less concerned with human nature, which it is inclined to treat as something which can always be re-fashioned to fit whatever political form is regarded as most desirable. Its real data are impersonal forces which may have originated in the conflict and conbination of human wills but have come to supersede them.(12)

「近代も最近になってから起ったような政治理論は、人間性というものを余り問題としていない。人間性を、最も望ましいと看做されるいかなる政治形態にも適合するように、いつでも再形成し得るものとして取り扱う傾向がある。その理論の真の材料は、もとはといえば諸もろの人間意志の闘争や結合に源を発してはいても、すでにそれらの意志にとって代ってしまった後の、非人格的な力である。」

このようにして形成される理論には、すべての人間の動きを余りに傍観視・唯物視してしまうことに慣れさせてしまって、若い人の心に倫理性の育つ余地を作らないという欠点があるかもしれない。しかし、少くとも現代において政治学の立論をするに当っては、アーノルドの主張とは逆に、最善の自己とか人間の理性とかいうものに、過大な期待を寄せるということは殆どないといってもよいのではないか。つまるところ、教養に根ざした理性によって階級を克服できると判断したところに、彼の基本的な過誤があったと、考えざるを得ないのである。

四

一八七一年、パリにはコンミューンの旗がひるがえって、歴史はここに漸く、社会主義革命時代の到来を告げたのであった。欧州列強には独占資本が形成され、帝国主義の発展に伴って、すでにいくつかの新しい戦争を経験した。当時アーノルドがイギリスにおいて無秩序と見たものは、実は、資本制の進行に伴う矛盾激化の現象だったのである。すなわち、アーノルドが同情や信頼を寄せようとしなかった労働者大衆が、ここに、社会体制を改革する歴史的先兵としての主役を演じていたのであった。当時より現在に至るまでにも、資本家と労働者というように、相対立する階級を基礎として国家が構成されている枠内で、この牢固たる国家機構の下、教養によって階級をなくす革命など、とうてい実現の見込みはなかったであろう。革命とは、フランス革命やロシヤ革命に見られるように、人民の力による社会体制の変革を意味する。革命と、既存の国家秩序を擁護するための人民の抑圧とは、本質的に相いれない性質のものであろう。当時既に世に問われていた新しい社会科学の諸文献に、アーノルドは学ぶことが足りなかったのではなかろうか。たとえば「資本論」第一巻の出版は、「教養と無秩序」が初めて雑誌に載ったと同じ一八六七年であるが、それに先立つマルクス等の手になる「共産党宣言」（一四八年）、「経済学批判」（一五九年）などには、彼が関心を示した形跡は全くないといってよい。このような態度が、結果的に、彼の心魂を傾けたこの社会評論を、迫力の乏しい、観念的で現実性の薄いものとしてしまった傾きがあるといえはしないだろうか。

最後に、以上のように社会科学に係りの深いこの問題を、改めて文学の立場から少々考えておきたい。彼が社会改革の根拠を教養に求め、教養の中核として「美と光」の理念を掲げたことは、将に文学者らしい発想だったと思うのである。「美と光」が象徴するような人生に善美を求めるという姿勢は、アーノルドの文学批評における特有の美点であるが、ただ、文学における理念がそのまま社会批評にも当てはまると考えた所に問題があった。これは同時に、当時の知識水準における文学者の手になった社会批評として、その力量の限界というものを、われわれに感じさせざるを得ないところであろう。エリオットの言ったように、イギリスの文学をヨーロッパの文学に橋渡しをしたといわれるアーノルドにしても、本格的に政治批評を手掛けるには、なお深い、専門的な検討を必要としたと思われるのである。つまりは、社会批評家としては、彼は人間性の未来を信じきった、飽くまで文学的な社会改革者であり、人間主義的なロマンチストに留ったというべきなのであろうか。しかしながら、彼が文学の中に、真正面から、大胆に社会文化批評をとり入れたという事実は、これをもって、英文学史上の画期的な功績と成したのである。

その後英米では、二十世紀現代に至るまでに、政治思想を本格的に扱った作家としては、ハーバート・リード(Herbert Read〔1893-1963〕)がその代表として挙げられるであろう。彼はその著「アナーキズムの哲学」"The Philosophy of Anarchism"〔1940〕の中で、その理想とする社会の極限をアナーキズムの達成に置いているのだが、現代の急速に進渉する戦争と公害と独占の物質主義文明の下からいかようにしてこれを実現するのか、アナーキズムは未だに理論の構築すら完成されていない。

Yet in the enterprise of theoretical politics failure is of the essence. We may best think of Arnold's effort as an *experimentum luciferum*, an experiment of light, rather than as an *experimentum fructiferum*, an experiment of fruit.(13)

「にも拘らず、理論政治学における企図にとって、誤謬は本質的なものである。我らはアーノルドの努力を、成果ある実験としてよりも光の実験として、最善に考慮することができよう。」

これはコロンビヤ大学の著名な批評家・教授であるライオネル・トリリングの言ったことばである。いかなる嘘構、想像の産物でも、事実によって裏付けられる論証の可能性にのみ価値があるわけではなく、その論理が具体化され、統合されてくる姿勢の中に、またその姿勢の生じてくる奥深く、行動に動機を与える中心部を照し出すという作業そのものにも、一半の値打ちがあるということなのであろう。こういう意味で、アーノルドの態度は今なお肥沃な意義を有し、道義的に無視し得ないものがあるのではないか。まして、民主主義下にあるといいながら、政治意識の必ずしも充分とはいえない日本の階層にとって、「教養」の意義を改めて検討してみるのも、決して無駄なことではあるまい。

〔註〕

(1) M. Arnold: Culture and Anarchy——The Complete Prose Works of Matthew Arnold V (Ann Arbor the University of Michigan Press) p.222 *l.*28

(2) Ibid., p.223 *l.*29

(3) Ibid., p.233 *l.*34

(4) Charles Augustin de Sainte-Beuve (1804-1869) フランスの有名な詩人批評家で、近代批評に科学的心理的手法を確立し、客観的で的確な人間解剖を行なった。

(5) "Arnold was not a man of vast and exact scholarship, and he had neither walked in hell nor been rapt to heaven;"—— T.S. Eliot: The Use of Poetry and the Use of Criticism, Matthew Arnold (Faber and Faber Limited) p.104 *l.*15

(6) Culture and Anarchy—— The Complete Prose Works of Matthew Arnold p.165 *l.*3

(7) Ibid., p.165 *l.*32

(8) Ibid., p.165 *l.*1

(9) Ibid., p.99 *l.*11

(10) Ibid., p.99 *l.*28 "In thus making sweetness and light to be characters of perfection, culture is of like spirit with poetry, follows one law with poetry."

(11) T.S. Eliot: Note towards the Definition of Culture (Faber and Faber Limited) p.22 *l.*15

(12) Ibid., p.88 *l.*23

(13) Lionel Trilling: Matthew Arnold (The World Publishing Company) p.233 *l.*3